様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：５４５０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０６４１７

研究課題名（和文）イエズス会の手紙から読み解く中世ヨーロッパに伝えられた中世日本の建築空間

研究課題名（英文）Images of medieval Japanese architecture and urban space transmitted to Europe through Society of Jesus letters and manuscripts

研究代表者
ピチニニ・東野　アドリアナ（Higashino, Adriana Piccinini）

明石工業高等専門学校・建築学科・准教授

研究者番号：７０４３５４３６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：16世紀以降にヨーロッパで出版されたイエズス会書簡を分析・考察を行い、中世ヨーロッパにおける日本の建築空間及び都市のイメージがどのように形成されたのかを明らかにした。調査の結果、2 回収録・出版された書簡は多数存在したが、3 回以上出版されたものは11通があり、4 回以上出版された書簡は3通がある。これらの書簡からは1）日本人の性格はキリスト教的に好ましい、2）日本には繁栄した都市が沢山ある、3）日本の住宅は木材でできており、よく燃える、4）　イエズス会が教会として寺を再利用したものが多い、5）　豊後に建てられたとされる日本初の病院は、元はイエズス会の家として使われていたことが分かった。

研究成果の概要（英文）：According to the analysis of 16th century published Society of Jesus letters was possible to establish how images of Japanese architecture and urban space were transmitted to Europe. There were several letters which were published twice, but only 11 letters were published three times and three letters published four times. According to the letters 1) Japanese people had the appropriate character to become Christians, 2) In Japan the were several large and prosperous cities, 3) Japanese houses were made of timber and easily burnt, 4)The Society of Jesus converted Buddhist temple buildings into churches, 5) The first hospital built in Japan (Bingo) was a former society house.

研究分野：建築史

キーワード：日本伝統建築　安土桃山時代　イエズス会史料　南蛮文化

１．研究開始当初の背景

イエズス会は、イグナチオ・デ・ロヨラ（1491 年-1556 年）により、1534 年に設立された。イエズス会宣教師は、当初から日本やアジアでの宣教活動に関する記録や情報の交換及び管理に力を入れており、イエズス会本部のあるヨーロッパから受け取った手紙を大切に保管し、ヨーロッパへ送った手紙の写本を必ず残していた。また、記録や情報の管理が重要であるとも考え、1540 年にはバチカン図書館を模して、Archivum Romanum Societatis Iesu (ARSI)という資料収蔵館を作っている。しかし、イエズス会は 1756 年にポルトガル、その後にスペインやフランスからも追放された、1773 年にはバチカンの命令により活動が禁じられる。このため、イエズス会所有の建物は各国で国に差し押えとなり、史料の多くは売却され行方不明となった。1814 年に再び活動が認められ、イエズス会員の歴史家の活動により 1940 年以降に史料の保管場所が明らかにされた

２．研究の目的

中世ヨーロッパにおいて日本の建築空間及び都市イメージがどのように形成されたのか、イエズス会が残した当時の手紙や報告書などの史料の分析を通じて明らかにすることを目的とする。イエズス会宣教師がどのように日本建築と住居空間を見たか、日本でのイエズス会宣教師の住居環境はどのようなものであったか、日本人の一般市民の暮らしはどのようにイエズス会の宣教師には映ったか、日本でのイエズス会宣教師による建設活動、イエズス会宣教師がどのように日本建築と住居空間を理解し、ヨーロッパに伝えたかを明らかにすることを目的とする。また、本研究の成果によって、中世日本建築の空間特質、デザイン及び生活について、明らかにすることが期待できる。

３．研究の方法

研究方法は、①スペインやポルトガルに現存する史料を収集し、②それらの史料の中から中世日本の建築や都市、生活空間などに関する記述を抽出し、③当時描かれた南蛮屏風などの絵図における建築物の特徴や現存する日本の伝統建築物との比較を行う。

４．研究成果

アジュダ図書館とマドリッド図書館所有の日本に関するイエズス会史料の解読によりイエズス会は各地域の大名の保護を求めていたことがわかった。イエズス会宣教師は大名の支援を得ることに成功した時だけその地域での教会建設活動を行った。支援または資金不足の地域ではイエズス会宣教師が十字架だけ建てていた。イエズス会が教会として利用していた建物にはその地域の大名から頂いた建物が多い。それが住宅であった場合には移築して、教会に改造する。大名が仏寺院をイエズス会に与えることもあり、その寺の建物を教会に転用し、さらに大名の命令よりその寺で働いていた僧がキリシタンにされていたことが記載されている。イエズス会が廃寺を教会にしていたと日本語の歴史文献で書かれていることが多いが、本研究では廃寺ではなく大名命令より現役の寺を強引にキリシタンに転用させていた。

イエズス会が日本で利用した建物の多くは日本伝統建築、地域の有力者の支援によるものであったが、教会内部の飾りだけはインドを経由してポルトガルから取り寄せていた。そしてその教会内部飾りは教会の数より数が少ないためイエズス会宣教師が各教会を訪問する度に、ミサを行うため飾りを船で持っていたことの記載がある。

表１：４ 回以上出版された書簡の比較

出版年月日	場所	作者	書物番号		編纂言語	頁枚数（p）	文字数（字）
1549/11/05	Kagoshima	M.Francisco	1552-842-2	A	Spanish	約 14.5	約 5330
			1565-1220	B	Spanish	約 24	約 5079
			1570-442	C	Portuguese	約 45	約 8456
			1598-401(403)	D	Portuguese	約 16	約 9035
1559/09/01	Japan	Gaspar vilela	1562-438	A	Spanish	約 3	約 684
			1565-1220	B	Spanish	約 3	約 757
			1570-442	C	Portuguese	約 4	約 763
			1598-401(403)	D	Portuguese	約 1.5	約 879
1559/11/01	Bungo	Baltazar Gago	1562-438	A	Spanish	約 17.5	約 4230
			1565-1220	B	Spanish	約 19.5	約 4581
			1570-442	C	Portuguese	約 25	約 5127
			1598-401(403)	D	Portuguese	約 8.5	約 4836

16 世紀以降に出版されたイエズス会書簡を中心に分析・考察を行い、当時の日本の姿が宣教師たちによってどのようにヨーロッパに伝えられたかが明らかになった。調査の結果、2 回収録・出版された書簡は多数存在したが、3 回以上出版されたものは僅かであった。そこで、調査した書簡のうち 3 回以上出版されたものは 11 通があり、4 回以上出版された書簡は 3 通がある(表１)。

４回以上に出版された書簡の各出版の文字数とページ数を比較すると後に出版されたものの方は文字数が多く（表１の C、D)、出版社編集者が内容を編集したことがわかる。

書簡１フランシスコ・ザビエル、意訳：

私はマラッカに着いて、ポルトガルの庶民から日本のことを聞いた。1549 年の聖ホワンの日の午後、神の御心により日本へ向かうことになった。私たちはマラッカから中国船に乗った。中国の非キリシタンの人々は最初とても優しかったが、途中で何度も不安がって日本に来ることをやめようとした。日本に行く風にはもう間に合わないので、一年間中国で待たねばならないと言われた。また、中国船の船長が信仰する神の救しが出なかった。船長はその神に「日本に向かうための風があるか」、「日本に向かうべきか」を何度も問うたが、その返答は曖昧なもので、時により「はい」とも「いいえ」とも言った。マラッカから中国へ向けて 100 レグア 33 進んだところで、私たちはある島に停泊した。私たちはその島で中国海 34 の厳しい嵐に必要な木材を手に入れた。また、船長が信仰する神に祈り、供物を捧げて出港すべきかを尋ねた。すると神は進むべきだと言った。それなので皆、喜んでその島から出発した。風もよく吹いていた。少しして、船長は神に「自分たちの船が日本からマラッカに

戻れるか」を問うた。すると神は「船は日本に辿り着くが、マラッカに戻ることはできない」と答えた。船長はそれを聞いて、日本に行くことを戸惑い始め、中国で一年間待とうとした。このように、日本へ向かうことは悪魔の働きによって困難を極めた。中国に着く少し前、マグダレナの日 35 の前日にコーチシナ 36 というところで海が荒れて嵐になった。船のポンプ室の扉が開いていて、私たちの友である中国人・マヌエルが船の揺れによってそこに落ちた。皆が「彼が助かるわけがない」と思い、何日も水につけたまま放置して、数日後に救いだした。彼は頭に大きな怪我をしていたが、大事に至ることはなく、すぐに回復した。その後、船長の娘が海に落ちたが、海は大荒れで私たちは彼女を救うことができなかった。数日の間、皆が昼夜を分かたず悲しんで泣いた。中国の神を祀り、鳥などを始め様々な供物を捧げて「なぜ娘が死んだのか」を神に問うた。すると神は「娘は死なない」と答えた。この神は「マヌエルは死ぬ」とも答えていた。このように、悪魔によって私たちの運命がどれだけ振り回されたかが分かるだろう。私たちは彼らが悪魔を崇敬するのを止められなかった。私たちが説明しても頼んでも、彼らはなかなか耳を傾けようとしなかった。このようにして悪魔が人々を誤った道へと導くのを見ていることは辛かった。そういった悪い出来事があった日の晩、デウスが奇跡を起こした。（～省略悪魔がどれだけ人をまどわせるかの話～）神の奇跡は海を鎮め、おかげで私たちは島を出港することができた。数日後、中国の広東の港に着いた。すると皆が「中国で一年間待とう」と言いだした。私たちは彼らに日本へ向かうように頼み、「もし連れて行かなければマラッカの船長に報告する」「お前たちが約束を守らない人間だとポルトガル人に伝える」などと脅した。神のご加護を受け、彼らは広東に留まらず出港した。風もよく、数日後にはコーチンに到着した。彼らはコーチンで一年を過ごそうとしたので、私たちは「日本へ向かう風にはもう間に合わない」と思った。しかし「コーチンの港は盗賊が多く殺される可能性もあるので、一年を過ごすには危険すぎる」という噂を耳にした。コーチンの船が私たちの船に近づくのを見た船長は、コーチンへの入港は危険だと考えた。その頃には広東に戻れる風は既になく、私たちは日本へと向かうことになった。かくして、悪魔の働きかけにより船長や船乗りの反対があっても、私たちは神の庇護のもと、1549 年の聖母被昇天の日に、日本の地へとたどり着いた。そこで私たちは、パウロ・デ・サンタフェの故郷である鹿児島の人々に歓迎された。次に、日本での経験と今までの出来事について報告する。まず、日本人は、今まで私たちが出会った中で最も誠実な人々だ。非キリシタンの人々の中で、日本人は特に優秀である。皆話しやすく、基本的に良い人が多い。悪知恵を持つものが少なく、義理を大切にする。貴族も含めて日本人の多くの人々は貧しいが、金銭的に貧しいことを悪いことだとは思っていない。これはキリスト教の人々にも見られないが、たとえ貴族が貧しくても、庶民の貴族に対する礼節は保たれている。例えば、武士は武士と、貴族は貴族としか結婚しない。別の階級の者と結婚すれば、品位を欠くことになる。このように、日本人は金より名誉を大切にする＜ヨーロッパの金銭的社会とは違う＞。人々は礼儀正しい。武器を好んで、それを信用している。身分にかかわらず、14 歳からは常に大刀と小刀を持ち歩く。日本人は言葉遣いにおいても無礼を許さない。庶民は上の階級の人々を尊敬しており、全ての武士がその土地の領主に懸命に遣えている。なぜそんなことをするのか。彼らはそうしないことによる罰を恐れている訳ではない。自分自身の名誉のために遣えているのだ。彼らにとって食べ過ぎはご法度だが、飲酒に関しては自由である。米から作ったワインを飲み、賭け事はしない。賭け事を疚しいことだと考え、それが人の欲を増長させて盗人にすると思っている。約束はあまりしないが、する時は必ず守る。多くの人は読み書きができて、布教に都合がいい。妻は一人だけもつ。盗人は少なく、窃盗行為を大いに嫌い、とても親切で好奇心旺盛である。デウスの話については、理解できる言葉であれば聞きたがる。今まで私が見た中では、窃盗に対してここまで強い反感を持っている人々は初めてである。動物を模した偶像はない。多くの人々が先祖を敬い、西洋でいう哲学者のような人々を祀って崇拝する。大多数の人は太陽を崇め、他の人々は月を崇める。彼らは論理的に話を聞く。もちろん、彼らの行いの中にもキリスト教的に罪に当たるものがあるが、なぜそれが罪であるかを論理的に説明すれば、彼らはそれを理解する。そのように、彼らは神父や僧よりも論理的な思考を信じる。僧たちは特に罪深いが、子供の頃からその様子を見ている人々はそれに疑問を覚えない。私たちは僧の悪い行いを注意するが、かれらは自分の行いを罪とは思わず止めようとしない。僧たちはたくさんの武士の子供を寺に預かり、読み書きと共に悪い行いを教える。僧たちの中には私たちでいうフラーデスのような服装の人々がいて、丸坊主にした頭を 3 日か 4 日おきに丁寧に剃り上げる。この宗派はとても現在の中華人民共和国南東部。漳州。広東語でコーチシナ。大きく、尼僧も存在する。しかし尼僧たちはあまり一般市民に好かれていない。なぜなら、尼僧が妊娠した女性に堕胎薬を飲ませることを、皆が知っているからだ。これは妥当な評価だろう。尼僧たちも同様にフラーデスのような服装をしている。僧と尼僧は仲が悪い。この土地で二つ、衝撃的なことがあった。一つ目は、人々が罪を認識しておらず、半ば当然のようにそれを行うこと。二つ目は、一般市民が僧よりもよい生活をしていること。しかし、それにも関わらず人々は僧たちをとても尊敬している。僧たちは多くの過ちを犯すが、中には賢明な者もいる。私はこの地域でとても尊敬されている日心という僧と何度も話をした。彼はキリスト教で言うところの司祭のような偉い人で、名前は「誠の心」を意味する。私は、人間の魂が肉体とともに消滅するかについて何度も彼と議論した。彼は魂が不滅であることに賛成することもあれば、しないこともあった。残念ながら、他の文学者たちは彼ほどの理解を示さないだろう。日心は私と本当に仲がいい。僧たちは私たちが遠方から日本に辿り着いたことに驚いていた。庶民も僧たちも皆、それが神の支えによるものであると思った。このように、土地の言葉ができるようになれば、この土地は布教に向いている。神の助けがあれば、すぐに言葉も覚えるだろう。既にモーセの十戒は日本語で言えるようになった。（～省略：神への感謝～）2 年以内に皆を日本に呼び寄せる手紙を送る。誠実なクリスチャンであれば日本に来られるだろう。パウロ・デ・サンタフェの街では領主に迎えられた。彼はとても親切で優しかったので、ポルトガルの神父たちは驚いた。彼らは皆、パウロがキリシタンになったことを受け入れていた。なぜなら、パウロが他の人々が知り得ないポルトガル人の動向をインドで見聞きしていたので、領主がそれらについて尋ねたからである。パウロは領主に会うために、鹿児島から 5 レゴアほど離れた

所へ向かった。その際マリア像を持参すると、その土地の領主は尊敬の眼差しでそれを見た。その後、マリア像を領主の母に見せたところ、彼女はとても驚いていた。パウロが私たちのいる鹿児島に戻って何日か後、その母がマリア像の複製をしたいと訪ねてきた。それなので私たちは、複製に必要な材料などを頼んだ。また、母は日本語で書かれたキリスト教の書物を欲したので、パウロがそれを書いて送った。パウロの親戚や妻子は皆キリシタンになった。彼らは文字が読めるので祈りを覚えるのが早く、キリシタンになるのに時間はかからなかった。神よ、私たちに彼らと話すための知恵をお授けください。それが出来れば、布教は容易い。私たちは、今はまだ子供のように言葉を知らないので、先にそれを覚えねばならない。私たちは子供のように文字を覚え、彼らに純真な心を示す必要がある。(〜省略この土地に住む悪魔の誘いに負けず頑張りたい。神よ、私たちにその力をお恵みください。など〜)

日本人は家畜を殺さず、それを食べることもしない。しばしば魚を食べる。米も麦もあるが少ない。様々な野菜があり、果物は少しだけある。皆とても健康的で年寄りが多い。私たちもこの土地ではとても体が元気で、神の計らいで魂も溌剌としている。皆が僧を尊敬しており、彼らの言うことを聞く。僧たちも肉と魚は口にせず、1日に一度だけ果物と野菜を食べる。酒は飲まない。僧の数は多く、彼らは態と狭い家に住む。さらに、食事を最小限しか摂らないので、とても貧しい。彼らは夜に女性と話すこともない。特にヨーロッパの神父のような真っ黒な服装の僧は、そういったことに厳しい。(〜省略〜)

私たちはここで、神が万物の創造主であることを皆に伝えたい。私たちは僧に対して何もしないが、僧は私たちが神の話をすると脅しに来る。(〜省略キリスト教・天使・悪魔などについて〜)鹿児島に着いたが、都まで行ける風はなかった。都は日本の中心となる街で、この国の統治者が住んでいる。五ヶ月後には風があるはずなので、その頃に都に向かうつもりだ。都までは 300 レゴア 50 程度の距離がある。都に関して、とてもたくさんの話を聞く。都には 9 万の家と大きな大学があり、大学には 5 つの学校がある。その中に 200 以上の僧の住まいがある。法華宗の中で、フラデのような女性の僧は尼型と呼ばれている。また、この大学とは別に 5 つの大学がある。高野・根来・比叡山・近江(谷の峰)。この 4 つの大学が都の周りにあり、各大学には 3500 人以上の学生がいる。さらに遠い坂東というところに、もう一つ大学がある。その大学が日本で一番大きい。坂東はとても広い地域で、6 人の領主が最も強い。これらの大学や都については、実際に見ていただかないことには筆舌に尽くしがたい。他に、小さな大学も全国にたくさんある。私たちは大学に手紙を書いて、キリスト教の話を聞くように頼むことにする。また、日本の統治者に頼んで、中国への入国の口添えを貰おう。日本の統治者は中国の王と仲が良い。中国にはたくさんの日本船がいつも渡っている。1551 年に、都から手紙が出せることを祈っている。聖ミカエルの日に、この土地の領主と話をして、キリスト教についての本を大切にするように言われた。同時に、この土地の人々の中に入信希望者がいれば、洗礼を受けさせても良いと許可が出た。この土地の人々は文字が読めるので、宗教に関する本を日本語に翻訳して出版したい。現在パウロが翻訳に取り組んでいる。私は今、神のおかげで満ち足りている。皆様、お元気で。

フランシスコ・ザビエルが日本に到着した最初の年の 11 月 5 日に鹿児島で記述した書簡。ゴアのイエズス会に宛てたものであり、日本についての初めての情報として非常に多くのことが綴られた。日本が宣教活動に向いた土地であることについて強くアピールされている。ヨーロッパの人々にとっては、日本について初めて出版された情報である。ザビエルの書簡では、日本がいかに布教向いているかをアピールした。そのため、キリスト教的に良い行いであると思ったものを書き連ねたと考えられる。物欲的にならずに必要最低限の生活を送ること、日本風に言えば「足ることを知る」ことに精神的な美学を見出し、日本人がそれを実践していることや、礼儀正しく好奇心旺盛で信心深さも持ち合わせていることなどについて語っている。この書簡が日本についての初めての確実な情報であったことから、ヨーロッパの人々から見た日本人のイメージは非常に好ましいものとして広まったと考えられる。

書簡２ガスパル・ヴィレラ 意訳：

A/B:昨年はこの土地、特に私が一年間住んだ平戸について詳細に書いた手紙を送った。そこでは 1300 人がキリスト教に入信した。私たちは平戸で、もともと仏教建築だった 3 つの建物を教会に変えた。ある僧は、彼らがザビエルにしたのと同じように、宣教師たちを追放すべく、町の人々に働きかけた。しかし、その僧は人々から嫌われていた為、皆あまり耳を貸そうとしなかった。墓地の十字架が壊されたので、キリシタンである土地の領主がそれを罰しようとしたが、神は天に十字架を描いて皆にその存在を知らせた。この土地に着いて何日かが経つが、十分な経験が得られず、地元の考え方が理解できない。コスメ・デ・トレスの命で、都にいる日本の統治者と話をしに行くように言われたので、都へ向かう。都には全ての法律や知識・文学が存在するので、大学でそれを学んでくる。豊後から都までは 140 レゴアある。私はこの仕事の為に死を覚悟して、あらゆる苦難や寒さに負けず、任された役割を果たす。通訳として日本人の仲間を同行させる。私は多少の日本語はできるが、宗教を説くだけの語学力はまだない。私の成功を祈ってください。

C:昨年はこの土地、特に私が一年間住んだ平戸について詳細に書いた手紙を送った。そこでは 1300 人がキリスト教に入信した。私たちは平戸で、もともと仏教建築だった 3 つの建物を教会に変えた。ある僧が宣教師たちを追放すべく町の人々に働きかけ、私たちは平戸から追い出された。そのため神は天に怒りを啓示したが、人々は盲目で、神の啓示に気づくも者は僅かだった。この土地に着いて何日かが経つが、十分な経験が得られず、地元の考え方が理解できない。コスメ・デ・トレスの命で、都にいる日本の統治者と話をしに行くように言われたので都へ向かう。都には僧たち総本山であるひね山がある。そこには多くの僧が住んでおり、キリスト教でいうパリ大学のようなもので、全ての法律や知識、文学が存在する。私は大学でそれを学んでくる。豊後から都までは 140 レゴアある。私はこの仕事の為に死を覚悟して、あらゆる苦難や寒さに負けずに任された役割を果たす。このように私の周囲には悪魔の手先が多く大変なので、私のために祈ってください。ロレンソという日本人を同行させる。彼が、私の代わりに翻訳とキリスト教の解説を行う。私は日本語が出来ないわけではないが、母国語

とする彼の方が上手く話す。
D：昨年はこの土地、特に私が一年間住んだ平戸について詳細に書いた手紙を送った。2 ヶ月でキリスト教徒は 1300 人になった。私たちは平戸で、3 つの塔や仏殿を教会へと建て替えた。このようなキリスト教の活動に対して僧たちは怒り、彼らがザビエルにしたのと同じように、宣教師たちを平戸から追放すべく、町の人々に働きかけた。墓地の十字架が壊され、他にも多数の心無い行いによって私たちは平戸から追放された。神は天に在り在りと十字架を描いて皆にその存在を知らせたが、人々は盲目で神の啓示を理解するものは殆どいなかった。そのような中でも、神のご加護を受けたキリシタンたちは改宗することなく耐え忍んだ。この土地に着いて何日かが経つが、十分な経験が得られず、地元の考え方が理解できない。私はコスメ・デ・トレスによって、ひね山へ向かうことを命じられた。ここにはたくさんの僧がいて、キリスト教でいうパリ大学のようなところだ。そこには全ての法律や知識、文学が存在するので、私は大学でそれを学んでくる。豊後から都までは 140 レゴアある。私が向かう都には特にたくさんの悪魔の手先がいる。私はこの仕事の為に死を覚悟して、あらゆる苦難や寒さに負けずに任された役割を果たす。成功を祈って欲しい。同行者のロレンソが通訳およびキリスト教の解釈を務める。私は日本語が出来ないわけではないが、母国語とする彼の方が上手く話す。

ヴィレラが日本に到着して 1 年後（1559/09/01）に記述した書簡。到着後 1 年の間に、彼らに起こった出来事について綴られた。書物 A、B は同様の内容であるが、これらを書物 C と書物 D を比較すると内容の違いがわかる。

書簡 3 バルタザール・ガゴ意訳：

9 月にあなたたちの手紙を受け取った。ポルトガル船は 6 月に平戸に着いたようだが、豊後から平戸までは 70 レゴアも離れている上に戦争があったので、手紙を受け取るのに時間がかかった。その間、私は一日を千日にも感じた。イエズス会に関する良い知らせがたくさんあり、喜ばしく思う。マルコからの知らせも喜ばしい。しかし、アフォンスの死は残念だ。アフォンス・デ・クラストの冥福を祈る。（～省略マラッカでの仕事の成功についての話など～）昨年はたくさんの手紙を書いたが、その手紙を運んでいた船が中国で消息を絶ったため、それらの手紙に書いていた内容を覚えている限りでここに記す。まずは豊後の教会について。豊後にはたくさんの宣教師がいて、コスメ・デ・トレスを筆頭に、その下には 2 人の宣教師が、さらに下には 6 人の修道士がいる。また、彼らの家では何人かの日本人が使用人として働いている。家については特にこれといったこともないので、取り立てて説明はしない。私たちは普通に暮らしていて、多くの時間を日本語と標準的な勉強にあてる。家では日本語だけで話すように努めている。ミサも日本語で行うように努力している。夜になると、教会の人々も外部の人々も皆がチャペルに集まり礼拝をする。夜には日本人は私たちの家の警備も行い、それらをとても効率が良くこなす。日曜日と特別な日には、ロレンソという日本人とドゥアルテ・ダ・シルバ、ジョアン・フェルナンデスの三人がミサで神の教えを説く。彼らが基本理念を解説して、最後に神父が皆の救済を祈る。日曜日は遠くからミサに来る人が多い。彼らは土曜日から教会に泊まるので、日曜日には私たちの家と教会が人で埋め尽くされて、扉がすべて取り外される。場所が足りなければ、縁側も使用する。（～省略人々がどれだけ熱心に活動しているか～）祝日には街を巡礼する。今年はイースターの時期にヴィレラとロレンソが教会に来られない人々のために、少し離れた山に赴いた。そこには 5、6 の村があって多くのキリシタンがいるが、皆教会には来られないので私たちは年に一度ほどそこを訪れる。昨年、クタミというところに神父と修道士が赴き、大きな成果を上げた。また、この家では修道士であるルイス・デ・アルメイダが 20 歳の男子の病気を治し、皆を喜ばせた。この土地の領主は皆から恐れられている上に私たちとはとても仲が良いので、教会に対する戦争や反乱は起きないだろう。豊後のキリシタンたちは日曜日に礼拝をする。私たちは豊後に箇所の土地を持っている。初めは上の土地に家を作り、それを教会として使っていたが、今は病院として使っている。今年は、その家の向かいに更に別の病気を治療するための木造の建物を作った。これは石の上に建てられており、真ん中には祭壇が置かれている。（～省略祈りについて～）8 間あって、多い時には扉を閉めたままでも 16 人を受け入れることができる。その家の一つの部屋を、病人を収容する部屋にする。その部屋の奥には縁側があり、治った病人はそこから出て行くので、皆がその様子を見ることができる。薬は年配の日本人が作る。都に行くと日本の統治者がいて、堺というベニスのような街があり、ひね山には多くの僧がいる。この夏はたくさんの病人を治療した。中には手術をしたものもある。私たちは外科と薬剤の二種類の治療を行っている。都からそれを学びに来た日本人が、パウロという洗礼名を与えられた。この者は僧たちと共に生活していたらしく、書物をたくさん持ってきていたが病死した。その後に来てミゲルという洗礼名を与えられた日本人も同様に病死した。そこで、私たちは彼らから教わった中国伝来の薬を使った。その薬は熱などの様々な病気に効き目がある。豊後にポルトガル船が来たが、病気が蔓延していたので、その薬で治した。豊後の領主は私たちに定期的に収入を与えた。（～省略近隣住民の話、仏教の葬式の仕方など～）今年、博多で起こった戦争で私は敵の手に落ちた。私が助かる見込みはなかったが、キリシタンたちは命をかけて私を助けようとした。100 人の兵が、豊後から無理やりにでも私を助けに来ることを決めた。しかし、私は皆が助けに来る前に逃げ出すことができた。ガスパル・ヴィレラが都にいる。都はここから 150 レゴア離れていて、そこには全ての法律や学問がある。日本人の通訳者であるロレンソもいる。ロレンソはとても弁が立ち、神のことをよく理解している。戦争があるので、今から手短に博多の話をする。博多は大きな町で、商人がたくさんいる。平戸から陸地続きに行けば 5 日間かかり、海路で行けば 20 レゴアだ。1558 年のイースターを過ぎた頃に、豊後の領主が私たちに海辺の土地を与えた。そこには 60 人の大工がいた。領主は私たちに、ジョアン・フェルナンデス 75 を送って家と教会を建てるように言った。家と教会が完成し、たくさんの礼拝者が来た。洗礼を受けた者もいた。イースターを過ぎた頃に 2000 人の兵が攻めてきた。豊後の領主と彼の家臣たちは豊後を守ったが、夜になると豊後の僧たちが隣村の僧たちと手を組んで連絡を取り合い、敵を手引きしたので、豊後を明け渡すことになった。豊後の家臣たちは投獄されて殺された。私たちは十字架を背負ったまま暗い夜をむかえた。ジョアン・フェルナンデスと何人かの子供を船に載せて平戸に送った。暗闇の中、皆が自分にできること

を行った。ギルエルメというポルトガル人の船乗りと私とその地域のキリシタンたちは、教会の飾りなどと共に日本人の船で海に逃がされた。しかし朝になると船長が私たちの荷物を盗み、私たちを殺そうとした。ところが、外国人を殺すことに恐怖を覚えて躊躇った船長は、殺すのは辞めようと言い始めた。しかしながら、他の船員たちは私たちを殺すことを勧めた。荷物は全て奪われ、シャツ一枚になって 4 日間を船で過ごした。その後船長は豊後の兵に、自分たちの船に外国人が二人いることを知らせた。すると武器を持った兵が船にやってきて、船長への罰として彼が私たちから盗んだものを奪った。私たちは丸裸にされた。この状況の中で私たちは、兵たちと共に動いた方が良いと判断した。その時、私のことを知っている権力者が来て、体を隠す布をくれた。博多の海辺に戻ると、兵たちは船の中で手に入れたものを山分けして、仕事に戻っていった。私たちは裸で取り残された。町の門は全て閉まっていて、警備員が付けられていた。別の村から来た者たちが長刀などを振りかざして、私たちに金を要求した。彼らの村に連れて行かれて、更に服を脱がされた。私たちは殺されそうになり、穴に入れられた。もう駄目だと思った。村人たちは私たちが日本を壊しに来たと喚いていた。その時、人々から尊敬されている偉い侍が来て、私たちを穴から逃がした。そして、刀を抜いて銀の在りかを訊ねた。私たちは侍に「この有様を見て下さい。何を持っているというんですか。」と言った。すると侍は「お前たちの処遇は追って伝える。」と告げて去って行った。私たちは殺されずに済んだ。その後、私たちは町の権力者であるキリシタン・ヨハンに助けられ、衣食住の世話をして貰った。この間にギルエルメ（ポルトガル人の船乗り）の居場所が分からなくなった。ある兵がギルエルメ 76 を所有していたので、ヨハンが買い戻した。私たちは 10 日間、ヨハンの家にいた。私たちを殺さないように抗議した人々はポルトガル人を恐れており、ポルトガルの船が攻めてくることを危惧していた。キリシタンたちはポルトガルと貿易をしていたのでポルトガルの船が来るはずだったが、船は訪れなかった。私たちは陸から豊後に逃げていた。いつの間にか三ヶ月が過ぎていた。豊後の領主と他の武士たちは、私たちが逃げてくることを予想して道端で待っており、私たちの逃亡劇を楽しんだ。平戸の人たちは私たちに何があったかを尋ねると共に、小麦粉・米・豚肉・魚・塩・皿・ナイフ・服・薪・金などをくれた。既に、博多の人々は自分たちに出来る限りの事をしてくれていたが、教会と家は全て燃やされ、地面は掘り返されて、井戸は埋められていた。このような戦争は博多が町となってから起きたことがなかったので、人々は私たちが博多に来たせいで戦争が起きたのだと怒鳴っていた。平戸はポルトガル人が最も多く訪れる場所で、宣教師では最初にザビエルたちが訪れ、ガスパル・ヴィレラもそこに 10 ヶ月間いた。概ね 2500 人のキリシタンが平戸にいた。私たちは寺から仏像などを取り外して教会に変え、墓地には綺麗な十字架を掲げた。仏像は大小の区別なく燃やした。博多では散々な目にあったが、平戸での活動は順調だった。しかし、その土地の僧と領主は激怒した。大火事によって最も大きな十字架が燃やされ、教会と祭壇はバラバラにされた。パドレは追い出され、博多へ向かった。

ガゴが 1559 年に焼き討ちに巻き込まれ、逃げ延びた後に書いた書簡（1559/11/01）。本文中でも説明されるが、この前年に書かれた複数の書簡を乗せたポルトガル船が、消息を絶ったため、消失した書簡の内容についても記述されている。博多の町を追われたガゴらの一行は、その逃亡劇の中で幾度かの危機に見舞われる。

まとめ

これら 3 通の書簡からヨーロッパに伝わった日本についてのイメージ：

1）日本人の性格はキリスト教的に好ましい
2）日本には繁栄した都市が沢山ある
3）日本の住宅は木材である、よく燃える
4）教会として仏寺を再利用した
5）豊後に建てられたとされる日本初の病院は、元はイエズス会の家として使われていた。

５．主な発表論文等

A. Piccinini Higashino: Jesuit architecture in Japan: how to convert a Buddhist temple into a church Adriana Piccinini Higashino, Anais de História de Além-Mar XVII (2016) pp 246-271, May 2018

A. Piccinini Higashino: B-11-116th Century Images of Japanese Architecture and Urban Space: Analysis of the letters from the Jesuit School of Alcala de Henares, Madrid, The International Symposium on Architectural Interchanges in Asia (ISAIA), 2016, Sep 2016

Shozo Sakato, Ayu Kawauchi, Adriana Higashino: Research on Human Inventiveness Origins Through Kindergarten Children's Sandplay Works, Journal of Architecture Planning AIJ vol.81 No723 pp1227-1237 May 2016

〔雑誌論文〕（計 4 件）

〔学会発表〕（計 5 件）

〔図書〕（計 0 件）
〔その他〕
ホームページ等
https://akashi.academia.edu/AdrianaHigashino

６．研究組織
(1)研究代表者
ピチニニ東野アドリアナ
（Adriana Piccinini Higashino　　）
明石工業高等専門学校・建築学科・准教授

研究者番号：70435436